
俺は魔人であいつは勇者で！？

h o z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は魔人であいつは勇者で!?

【Nコード】

N1322Z

【作者名】

hoz

【あらすじ】

魔王が打ち倒され、魔王軍に所属していたおかげで、職を失ってしまった魔人のカイン。

魔王を打ち倒すために、来たはずなのに道に迷い、森の中で迷子になっていた勇者のシャル。

この二人の出会いが、後に世界の運命を変えることとなる。

第1話 俺はニートでこれが始まりで!?

『勇者によって魔王は倒された』

普通なら物語の終わりを告げるはずのこの言葉、しかし俺にとっては違う、俺にとってはこれから新たな就職先を探すという何とも面倒な物語の始まりなわけだ。

俺の名前はカイン、何？ フルネーム？ そんなもん長すぎて忘れたとりあえずカイン、たった今職を失った哀れな魔人だ。おかげで俺の黒い瞳は死んだ魚のようになってる。

さっきまでの肩書きは34番目の魔王軍第三大隊隊長っていう無駄に豪華な肩書を持っていたわけだが今魔王が倒されたから魔王軍はこれで解散、よって新しい仕事を探さにやいかん訳だ。

お、俺の元部下が俺のところにきたみたいだ。

「隊長、これからどうしましょう？」

「おい、俺は隊長じゃない元隊長だ、そこんところ間違うなよ。これからどうするってどうしようもないだろ」

「ですよねえー、じゃあ自分は実家帰って畑仕事でも手伝おうかな」
「そうしろそうしろ、親孝行してこい」

さっきから俺のところにこうやって何人も相談しにきやがる、大変なのは俺もだっつーの。それにしても勇者もひどいもんだ、数千人の勇者が一斉に攻め込んできてどうやって、戦えってんだよ、魔王なんて、ただの金持ちの馬鹿か、歳とった爺さんがほとんどだっというのに、攻め込まれて勝てる訳ねえだろ。

最近の魔王はみんな魔王名乗って数ヶ月でくたばるから、魔王軍に入ったって全然稼げやしない、なんか人間の間じゃ魔王を打ち取った英雄は随分といい待遇を受けれるらしいから、血眼になって突撃してくるし、怖くて岩陰に隠れてるか死んだふりするのが関の山だ。

とりあえず城の宝物庫でも漁って何かもらって家帰るか。

と、思ってきたんだが勇者どもが宝奪い合って殺しあってやる、うー、こわっこんなところ居られるかよ、さっさと逃げよう。

ここで俺は重大なミスをしちまうわけだ、何かって？ こけたんだよ、それも盛大に。鎧を着てるせいでうるさいからすぐばれちゃう。

まあ、魔王を倒せなくて少しでも稼ぎたい奴の前に魔王軍の元隊長が転がり込んできたんだ、向こうは手柄建てるチャンスだと思って突撃してくるよなそりゃ、あははは……

あーこわっ、勇者こわっ、あれはもう勇者というより金と権力の亡者だろ。あんな鬼ごっこもう二度としたくない、てか、もう追いかけてきてないよね？ まだ追いかけて来てたら俺もう泣くよ？ いやマジで。

うん、とりあえずは大丈夫そうだ、こんな隊長マーク付いた鎧なんて着てるんじゃないかった、よしもう寄り道せずに帰ろう、まっすぐ帰ろう。

俺は黒い髪に着いた土を払い、立ち上がり岐路に着く。

歩くこと20分我が家にとうちゃーく、とはいっても家族もいな

いし別に特に何もすることないから、もう寝よう。

その日の夢で勇者どもに追いかけられる夢を見て、朝起きたら枕がぬれてた、泣くって言ったけど本当に泣くとは思わなかった。

さて、仕事探しに街でも行くか、おっと朝飯、朝飯。とりあえず俺はパンに何もつけずに食ってすぐに家を出た、今は仕事見つかるまで節約しないとな。

俺は職を探すために俺の家から歩いて5分ほどの街に来てみた、石畳の道に石造りの家屋、街頭には鉄塔の上に魔石がつけられているだけのシンプルなものだが夜にはそれなりに明るくなる。

それにしてもおかしい、街に昨日まであふれていた求人広告がすべて撤去されている、きっと風で飛んでいったんだよね、うんそうだよね。

とりあえず知り合いの店を回ってみたが、すべての店でもう働き手は足りてるって言われたよ、やべーよ、このままだと俺餓死するよ？ マジで生きてけないよ？ しょうがないから森で何か仕留めてくるか、このままパンだけの生活っていうのもむなしいし。

森の中に入ってもう1時間は経つが、いまだに猪一匹出てこない、木の実ばかり集まったけど、肉が食いたい！ 俺はベジタリアンじゃない！

それからしばらくさまよっていると、遠吠えが聞こえてきた。

もうその時の俺は肉が欲しくてたまらなかったから、もういつそのこと狼でも何でもいいと思って遠吠えの聞こえてきたほうへと駆けだしちまったんだ。いやはや、今思うと軽率だったもう少し考え

て行動すべきだった。

とにかく走っていると狼型の魔物が誰かを襲ってるのを見つけちゃったんだよ、ここで見捨てるほど俺は開く人に慣れないわけで、すまん嘘だ、ただ肉を食いたかっただけだったと思う。

まあ、一応隊長なんてやってたんだそれなりには強いんだよ俺って、そこら辺の魔物風情に遅れなんかとらねえんだぜ。

ここで出すのは、俺の十八番、加圧魔法、こいつを使えば大抵のやつは動けなくなるし動けたとしてもかなり動きは鈍る、こいつを使って今まで逃げ延びてきたといっても過言ではない。当然大したことない魔物だから地面にへばりついて動けなくなるわけだ、さて、こいつらを持って帰る前に一つ感謝でもされておくか。

「おい、あんた大丈夫か？」

俺はさっきまで襲われていたやつを見ると、なんと女じゃねえか、しかもかなりかわいい、金髪碧眼ロングヘア、来てる鎧は、まだ新しそうだ、腰には1メートルほどの両刃の直刀携え、背中には弓と箠えびら、こんだけの装備しててこんな魔物相手に苦戦してたのかよ、ずいぶん弱い奴だな。

俺なんて適当な麻の服だったのに、こいつより強いんじゃないのか？

「ありがとう、それにしてもすごい魔法ね」

そう言いながら、こっちに近づいてくるその女を見ていて何か違和感を覚える、なんていうんだろうかこれは、何かがおかしい。

「まあな、これでも魔王軍の隊長やってたんだぜ」

そういつて自慢げに笑った瞬間に、女の表情が変わり剣を振り上げる。

けど、振り上げすぎて後ろにこけやがった。

「だ、だましたわね」

さつきから、何かおかしいと思っていたがもしかしてこいつ……

「お前、勇者かつ!？」

「そうよ、この魔王の手下め、私が成敗してやる」

正確には元手下だ、ついで行っちゃえばこいつには倒される気がしない、とりあえず加圧魔法つと。

「えいつ」

「きゃあ、ちよつとなによこれ」

ああ、やっぱり動けないか、なんだか見ててだんだんかわいそうになってきた。魔法といっておくか。

魔法を解いてみたが立ち上がろうとしない、まさか今ので殺しちまったなんてことはないだろうな？　今まで数多くの戦場に立ってきたが殺したことがないことが自慢だった俺がまさか、こんなところで殺しちまったのか？

不安になって俺はその女に近づき様子を伺う。

「ひっく、うう」

あれ、もしかして泣いてる？

「あの」

「なによー、どうせ私は落ちこぼれのダメ勇者よ、魔物に襲われてるところを敵に助けられるようなダメダメ勇者よー」

ああ、泣いてるよ、完全に泣いてるようしようこのままだと完全に俺悪者だね、でもここで殺されてあげるっていうのも変だし……えーっと。

「泣くなー!!」

「ひっく……うう……」

あ、泣き止んだというか、すごい我慢してる。

「いいか、俺だってすごーくダメな魔人だった、でも今では隊長になれるくらいにまでなった、だからお前も変われる頑張れ!」

正確には隊長は狙われやすいから、くじ引きで負けたやつがなったんだけど嘘はついてない、だいたい俺この加圧魔法以外つかえないし。

「頑張る……」

うん、泣き止んでよかったこのまま帰ってこのことが知れたら、女泣かせた男として有名になっちまうとこだったぜ。

「私、頑張って、魔王を倒す」

「あ、魔王ならもう打ち取られたよ」

しばしのあいだ、沈黙が続いた。

「えっーーーーー！　じゃあ、あたしは何を目指して頑張ればいいのか！？」

「知るかボケ、自分で考えろ！」

「もういい、帰る」

そう言って、女は歩き出したのだが……

「おい」

「なによ、もう帰るんだから放っておいてよ」

「いや、そっち行くと魔人の村だぞ」

再び沈黙

「お前、もしかして帰り道解らないのか？」

女はこくりと頷き、うつむいている。

あ、また泣きそうになってきた。

「案内して……」

「いや、人間の街のほうに行ったら俺狩られるから無理」

あ、目に涙たまってきた。

「えっと、とりあえず俺の家来るか？　えーと、名前は？」

「シャル……」

これがこいつとの出会いだ、何とも間抜けのこの勇者との出会いが俺の人生どころか世界を変えるきっかけになるなんて誰が思っただろうか、だれも思わねえよな……

第2話 俺は家主であいつは偉そうで!?

さて、シャルを俺の家につれてきたわけだが、なぜか我が物顔で椅子に座って足を組んでいやがる、なぜこいつはこんなに偉そうなのだろう、もっとこう、部屋の隅で体育座りでもしているのがふさわしいような状況だというのに。

「ちょっと、あんたの名前聞いてなかったわね、おしえなさいよ」

なぜ、こんなに高圧的なんだこのダメ勇者は？

「カインだよ」

「そう、じゃあカイン、お茶出して」

なぜ、俺が命令されているのだろうか、確かに客人を招いたのだから茶の一つや二つ出すが、まあいいや、とりあえず出しておこう。

「はい、どうぞ」

シャルの目の前にティーカップに入れた紅茶を置くと、シャルは早速一口飲んですぐにカップを置いた。

「なにこれ？」

ん？ 虫でも入っていたのだろうか？ いやまさか俺に限ってそんなへまをやらかすわけがない。

「こんなまずい紅茶初めて飲んだわ」

「馬鹿言うな、家で一番高い紅茶だぞ」

なんてこった、客人用のうちで一番高いとはいっても、もう一種類しかないけど、とりあえずこれがまずいだと。

俺はティーポットから自分のカップに注ぎ一口飲んでみる。

うん、うまい茶葉の量、お湯の温度共に最適だったのがよくわかる、これがまずいのだったらこいつはいったい今までどんな紅茶を飲んできたんだ？

「もういいわ、さっきので汗かいちゃったからお風呂貸して」

「その、扉の奥が風呂だお湯は沸かしてやるよ」

ここまで、言われても優しくする俺って寛大だな、いやほんと。

シャルは俺の指差した扉を開け、すぐに閉めた。

「何よ、あの狭くて汚いお風呂は！？」

「いや、普通だろ……」

「あれが普通だっていうの？ 見るからに貧乏そうな格好してると思ったら本当に貧乏人なのね、もういいから昼食の用意して」

さすがの寛大な俺もさすがにこれには頭に來たよ、もう怒った。

俺はシャルの襟をつかんで家の外に放り投げてやった。

「ちょっとなにするのよ！？」

「こんな貧乏人にかまわずどうぞさっさとお帰りください、ほら荷物」

そういつて剣と弓と箒えびらを投げて扉を閉めた。

「ちょっと入れなさいよ！」

そういうながらシャルが扉をたたいてくるが、もう無視だ、このまま夜の森で魔物にでも食われてしまえ。

それからしばらくの間扉をたたきながらシャルはギャーギャーわめいていたが、諦めたのか扉をたたく音も声も聞こえなくなった。少しばかり罪悪感はあるが、あんなことを言われてまで面倒を見てやるような理由などない、大体あいつは勇者なのだから、そこから死のうがあいつの責任だ。

それでも非情になりきれないのが俺ってやつで、少し心配になって扉を開けて外の様子を伺ってみる、

家の前にはいないようだがいったいどこに行ったのだろうか？

とりあえず俺は家を出て森の中へと歩きだした、決してシャルが心配だからじゃないぞ、食材探しだからな、間違うなよ！

森を歩くこと数分、適当に木の実を集めながら歩いていると、誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。こっそりと近寄り見てみると、予想通りシャルが木の下で体育座りをして泣いていた。

「うう……ひっく……かえれないよ……」

もう反省しただろう、からそろそろ許してやるか。

「おい、シャル」

俺が話しかけると、シャルはあわてて涙をぬぐい赤くなった目で睨

んできた

「なによ、カインは敵なんだから話しかけないでよ」

面倒くさいやつだなこいつは。

「そうかいそうかい、俺は敵だから話しかけるなど。せっかく許してやろうと思って迎えに来たのにとんだ無駄骨だったな、じゃあな」

そういつて、俺が振り返り、家に帰るフリをするとシャルが慌て出す。

「ちょ、ちょっとまってよ」

「なんだ？ 敵の俺に用か？」

なんだかいじめるのが楽しくなってきた、もうしばらくいじめるとするか。

「いや、その」

「なんもないなら帰るぞ」

「ちよっと待ってって言ってるでしょ！」

「ならなんだよ？」

このままじゃ埒があかなそうだな、しょうがないからもうやめてやるか。

「あ、あんた私の仲間になりなさい！」

「は！？」

今こいつなんて言った？　もしかして俺の耳がおかしくなったのか？

「仲間なら何の問題もないから仲間になれって言ってるのよ」

またこいつはぶっ飛んだ発想を、開いた口がふさがらねえよ。

「勇者の仲間に魔人なんて聞いたことがねえぞ？」

「それは今までの勇者、私はそんな奴らとは違うの」

その弱さは確かのほかのやつらとは違うな。

「それで、仲間になるの？　ならないの？」

ここでならないって言ったらまた面倒なことになるよな。

「はいはい、仲間になりますよ」

「ほ、ほんと？」

いいって言われると思ってなかったのかこいつは？

「へーへー、ほんとです」

「じゃ、じゃあカインの家に行ってもいいの？」

だんだん目が輝いてきたなこいつ。

「仲間なんだからいんじゃないの？」

「そ、そうよね仲間だもんね」

「あ、でもあんまりわがままだったら仲間やめるから」

「わ、わかったわ気をつける」

こうして結局シャルは俺の家に帰ってきたわけだ。

「風呂入るか？」

「うん」

実に素直でよろしい。

「そうか、そのタオル使っていいぞ」

「のぞかないでよ」

「のぞかねえから早く行け」

まったく、そこまで俺は落ちぶれちゃいねえっての、さて、今のうちに買い物済ませてくるか。

買い物から帰ってきたがまだ、風呂から上がって来てはないみたいだ。俺は脱衣所の扉をノックする。

「なによ？」

「脱衣所に適当な着替えおいとくから」

「わかったわ」

俺は女の服などわからないから、適当に店で見繕ってもらったが大丈夫だろうか。とりあえず今のうちに飯でも作っておくか。

しばらくして、風呂から出てきたシャルは俺の置いておいた、青を基調としたワンピースを着て出てきた、特に文句は言わないからよかったんだとしておこう。

「ほれ、かなり遅いが昼飯だ」

「ありがとう」

そう言ってさらにパンとさっきの魔物の肉を焼いたものに果物で作ったソースをかけた料理を渡したら一切文句を言わずに食べた、さすがに魔物の肉は文句言うと思ったんだがな。

夜になり、寝る場所が俺の使っていたベッド以外にないことに気付き、さすがにシャルを床で寝させるわけにもいけないので、ベッドをシャルにやって俺は床の上で毛布にくるまって寝た。

次の日の朝、体がすごい痛かったが自分で招いた結果なのだからと我慢するでしょう。

第3話 こいつはバカで、腐れ縁で!?

燦々（さんさん）と降り注ぐ火の光の中、俺は一人くわをふるう。魔王軍にいた三ヶ月間は家に帰ることもなかったので、俺の家の畑は雑草だらけでとてもそのままじゃ使えそうな代物じゃなかった。

ちなみにどこぞのへっぽこ勇者は、もうすぐ昼だっていうのに家の中でまだ寝ていやがる。あいつ野宿したら魔物に襲われてすぐにくたばるんじゃないだろうか？

「おし、取り合えずはきれいになったな」

一面をきれいに掘り起し、なんとか畑として再び使えそうにはなった、そもそも街から少し離れた位置に家を建てたのだって、この土質がいいからだっただけだから、畑を作らなくては無駄になってしまう。

俺は掘り起こした時に、芋がいくつか出てきたので今日の食事はこれを使おうと思う。

俺はくわを納屋に戻し家の中へと戻るとシャルはまだ寝ていた。起こしてなんか文句言われても嫌なので俺はそのまま風呂に入り、昼食を作り始める。

昨日捕まえた魔物の肉なのだが、思っていたよりもうまかったのだから肉に関してはあまり困ることはなさそうだ。まあ、できればもっとまともな肉が食いたかったが。

薄く切った肉を焼いて、その上に卵を落とし塩、こしょうで味付

け簡単だが、ニートの俺には十分贅沢な食事だ。

「おい、飯で来たぞ」

布団の中で、もぞもぞと動くものの出てくる気配は一向にない。

「じゃあ、お前の飯はなしな」

「食べるー……」

そう言いながら、シャルは上半身を起こした。

「まず、顔洗ってこい」

「はーい……」

シャルはふらふらしながら洗面所へと向かい俺はその間にパンを切り、二人分の食事の用意をする。

「カイン、おはよー」

「ああ、おはようもう昼だけだな」

あいさつをしながら俺の正面の席に座り、手を合わせる。

「いただきます」

「どーぞ、召し上がれ」

こういうところはしつかりしてる所を見ると、一応それなりの躰は受けてきたのだろう。

「なあ、シャルお前どうやって帰るんだ？」

正直な話、そう何日も人を泊めてやるだけの金の余裕はない、できることなら自分で帰れるようになってもらいたいが、年間で数百人も遭難者を出しているあの樹海を通って人間の国のほうまで帰るのは森を熟知していないととてもできたもんじゃない。

「どうやっても何も、一人じゃ帰れないもん」

なぜこいつはこんなにも自信満々に帰れないことを言うのだろうか、せめて申しわけなさそうに言うぐらいのことはできないのだろうか？

「俺は送っていけねえぞ、そんなことしたら俺がくたばっちゃう」
「そのことなんだけど、私氣付いたの」

いったい何に気付いたというんだ？　あまり面倒でないことならいいんだが。

「私とあなたの違いってせいぜい耳の形くらいなのよ」

確かに俺たちの耳は横にとがってるけど、人間の耳はとがってない、そのほかにどんな違いがあるのかはパツと見わからないな。

「だから、フードでも被ってればばれないわ、それにばれたとしても捕虜だっていえば殺されることはないだろうし」

ああ、こいつは魔王城で暴れまわるあの勇者どもを見ていないんだな、むしろあれは強盗に近い。あんあな奴らの前で魔人の捕虜なんて見せたら、一瞬で首は寝られておしまいだ。まあ、フード被ればばれないだろうってのには賛成だが。

「だからお願い、送っていった」

両手を合わせて、頼むその姿は必死そのもの、ここまでされて断れたら最初から家になんて連れてきてないっての。

「わかったよ」

俺のこの一言を聞きシャルの顔が輝く、全く分かりやすい奴だ。せつかく掘り起こした畑もまたしばらく使えないのか。乗りかかった船だ最後まで付き合うとするか。

「ありがとー」

そう言ってテーブルを挟んで俺の手を握りぶんぶんとまるで子供のようにシャルは振り回す。

「じゃあ準備しないといけないな、お前は何か欲しいものあるか？」

「大丈夫よ、大抵のものは持ってるし」

「そうか、じゃあ俺は買い物行ってくるから留守番しといてくれ」

そう言っただけは、街へと向かった、あの森を抜けるのならついでに人間の街なども見てみたい、人間がどうやって生活しているのか。この前までは全く気にしてないなかったが、シャルに出会ってからは人間というものの理解も変わってきた、もしかしたら俺たち魔人と人間は理解しあえるのではないだろうかなんてね、そんなうまくいくわけねえな。

とりあえずフード付きのマントや、携帯食料を買い込み俺は家へと戻る。

「ただいまー」

あれ、返事がない、風呂も使っていないみたいだし。
そんなことを考えていると、森の方で爆発音がして鳥たちが騒ぎながら飛び立つ。

「なんだか面倒なことになってそうだな」

俺は荷物を置きすぐに走り出した。

森の中からは爆発の音が絶えず聞こえる、急がないとかなりやばいかもなこりゃ。馬鹿でかい音を鳴らしてくれるおかげでどこにいるのかはすぐにわかるので、俺は迷わずに走る。

俺の予想だと、間違いなくあいつだ、こんな時に限って俺んころに来やがって、くそつ。

走ること、数分ようやく走って走って逃げているシャルとそれを追う銀髪の男を見つける。

やっぱり、あいつだったか。

「ちょっと待ったー」

俺は大声で叫ぶが、爆発の音が大きすぎて声がかき消される。

ああ、もういいや、加圧魔法で……

俺が加圧魔法を使うと、銀髪の男は突然の上からの圧力に体勢を崩し地面にうつぶせになる。

「おい、ソルドお前は何やってんだ？」

俺はそう言いながら魔法を解除する。

「何すんだよ、俺はお前の家に侵入してたこそ泥勇者を退治してやろうと」

大方そんなところだろうと思ったよ、今俺の目の前にいる銀髪に赤い目して、俺同様に安そうな麻の服を着た褐色の肌のこの魔人の名前はソルド。一応、ガキの頃からの知り合いだ。

「誰がこそ泥よ！」

シャルは木の陰から顔だけを出して反論する、できれば今は面倒なことになるからやめてもらいたい。

「ほらあいつだよ、任せとけ、今俺がやつつけてやる」

そう言いながらソルドは右手をシャルの方に向け手のひらから火弾を飛ばそうとする、それを見てシャルはおびえて気の後ろに隠れてしまった。

「だから、やめろっての」

とりあえず俺はやめさせるために、もう一度、加圧魔法を使う。

「なにすんだよ!？」

「いいからお前は手を出すな、おい、シャルもう出てきていいぞ」
「ほ、ほんと」

おびえた小動物のように、シャルは木の陰から顔をのぞかせる。

「ほんとだから安心しろ。ソルドは手出すなよ」

「え？ 知り合い？」

ソルドは状況が飲み込めていないのか、俺とシャルを交互に見つめる。

これから、この馬鹿に説明しないといけないのかと思うと、少し憂鬱になってくる、誰でもいいから助けてくれないかな……

第4話 あいつは勇者で、ダメダメで!?

とりあえず俺の家に戻って、説明すること15分。やつのことでソルドが理解してくれて、どっと疲れが襲ってきて俺は椅子の背もたれによりかかる。

「いやー、なんか誤解しちゃってごめんな」

「まったくよ、死ぬかと思ったじゃない」

普通の勇者なら立ち向かうところを、逃げるあたりこいつのダメさが表れているな。

「それで、出発はいつするんだよ？」

そういえば決めてなかったな、できるだけ早いほうがいいなー。いつまでもいられたら俺が破算しちまう。

「いつにするシャル？」

「そうねー、別に私はいつでもいいけど」

「じゃあ、あしたでいいか？」

「いいわよ」

さてこれで決まりだな。俺は洗濯物をしまいに立ち上がった時にソルドのバカが叫びだす。

「ちょいまって！」

「なんだよ？ 何か用事でもあるのか？」

「いや、明日はやめておこう」

「なんでお前が決めるんだよ？」

まさか、こいつ、ついてくるとか言わないよな？

「俺もついていくからに決まってんだろ」

やっぱりか、ソルドがいるといつも面倒なことになるからあんまりついてきてほしくないんだが。

「ダメだ」

「なんでだよ、お前だけ若い女と一緒に、二人仲好くななんてそんなのゆるさねえぞ」

こいつは全くこんな発想しかできねえのかよ、だからバカって言われるんだよ。

「若いって言ってもよー、おい、シャル今何歳だ？」

「18よ」

「ほら、18だってよ……18!？」

「な、何よ、別に普通でしょ？ カインだって同じくらいでしょ？」

「俺とソルドは24だ」

「うそっ、だって見た目は私と大差ないじゃない!？」

確かに見た目は俺たちと大差ない、もしかしてシャルって老け顔なのか？ それとも……

「なあ、人間の平均寿命ってどれくらいだ？」

「え、そうね、80歳くらいかしら」

「なるほどな、俺たち魔人の平均寿命は100ちょいだ」

「そうなの？」

長生きすれば120とかも普通だからな、80なんて早すぎるくらいだ。

「簡単な話、俺たち魔人のほうが老化も成長も遅いってことだな」
「なにそれ、ずるーい」

ずるいといわれても、種族の違いなのだからしょうがないだろ……

「おい、俺のこと無視するなよ」

ソルドが騒ぎ始めたな、せっかく話題をすり替えたというのに、また話を戻しやがったなこいつ。

「そんなに来たいのか？」

ソルドは首を縦に激しく振る、このまま放っておいたら具合悪くなって諦めないかな、あ、だんだん遅くなってきた。

「おい、シャルどうする？」

「え？ 別にいいけど」

まあ、シャルがいいならいいか。

「いいってよ、とりあえず明後日でいいのか？」

こちらに笑顔を向けるが、その顔は頭の降りすぎで具合悪そうだ。

「うっぷ、明後日で大丈夫だ……」

「わかったから、じゃあ明後日の朝6時、うちに来いよ」

そういつて、俺はソルドの腕をつかみ立ち上がらせ、家から追出し、シャルのほうに向き直る。

「ということで、出発は明後日だ」

「わかったわ、それまでには準備しておく」

ということでは時は流れて、明後日の朝

「あいつ遅いな、もう置いていくか？」

おれは腕を組み、足を小刻みに動かしながら、ソルドを家の前で待っている。既に俺の懐中時計は、6時20分を指している。

「ねむい……」

さっきからシャルはこればかりだ、本当に朝に弱いなこいつは。そんなことを思いながら待つこと20分、やっとあのバカが走ってやってくるのが目に入った。

「遅いぞ」

「悪い寝坊した」

こいつはやっぱりおいて行ってもよかったんじゃないのか？ まああ少しでも戦力はいたほうがいいのは確かだが、こいつだって一応戦えるわけだし。

「ほらいくぞ、シャルもシャキツとしろ」

「うん……ふぁ〜」

こいつら本当に大丈夫なのか？　なんか先行き不安だな……

「ねえー、まだ森抜けないのー？」

「まだだ、さっきも言っただろうが」

「だって、何時間歩いてるのよ、もう足疲れてきちゃった」

こいつこの時間の歩行で疲れるのに魔王倒そうと思ってたのか？
こいつにだけは絶対に魔王は倒せないだろ、ていうか魔王城まで
たどり着けないだろ。

「いったん、休憩にしましうよー」

「そうだそうだー」

おい、ソルド貴様は別にそこまで疲れてないだろ、なんで俺だけ
敵にしようとしてんだ？

俺は、懐中時計を取りだし時間を確認する。

確かに、もう2時間は歩いたし、そろそろ休憩しておくか。

「わかった、休憩にしよう」

「やったー」

シャルが笑顔で近くの切り株に座ろうとするが、俺はシャルの腕
をつかんでその邪魔をする。

「何よ！？」

「休憩の前に、戦闘だ」

その言葉と同時にソルドが茂みの中に向かって火弾を放つ。
爆発と同時に魔物のうなり声が聞こえてくる。

「ほら来るぞ、しっかりしろよ勇者様」

茂みの中から飛び出してきたのは、頭に一本の角を生やした3メートルほどのクマの魔物。このていどなら何の問題もなく倒せるだろう。

俺はとりあえず加圧魔法を使ってみるが、速度がわずかに落ちる程度で大して効果がない。

いくら威力を押さえているとはいえ、ここまで聞かないと自信を無くしちまいそうだ。

「ちょ、ちょっと全然魔法聞いてないじゃない！」

「お前の腕試しだ、手伝ってやるからとりあえず倒してみろ」

どうせ無理だろうけど、どの程度戦えるのかは見ておいた方が今後のためにもなるしな。

「無理、ムリムリ、ぜったいむりー」

そう言いながら、シャルは逃げ出す。

「お前、本当に勇者か？」

「あんなの無理に決まってるでしょ、ちょっと助けてよ！」

ソルドも呆れて、開いた口が閉まらないよ。

「おい、カインどーすんだあれ？」

「どーするも何も、このまま放っておくわけにもいかないだろ」

とりあえずもう少し強めに魔法を使っておくか。

魔物は先ほどとは比べ物にならないほどの重圧に、地に伏せる。

「シャル、とりあえずお前がトドメさせ」
「う、うん」

シャルは剣を振り上げるが、腰が引けている。あんなので倒せるのだろうか？

「えいっ」

思いつ切り振り下ろした剣は魔物の頭に命中するが、薄皮を斬ったていどで、仕留めるには至っていない。

「シャルちょっとこっち来い」

俺が手招きをすると、こちらにシャルが駆け寄ってくる。

「ソルド頼む」

「ほいよ」

そういつてソルドはひととき大きい火弾を放ち、魔物に命中させると、魔物の体が炎に包まれる。魔物の悲痛な鳴き声はすぐにやんだ。

「あんたたちって、結構強いのね」

少し感動したようにシャルがそう言ってきたが、俺たちは二人合わせてため息を吐く。

「「お前が弱すぎるんだよ……」」

この俺たち二人の想いが、こいつに届くときは来るのだろう、と
りあえず戦力としては全く使えないってことだけは分かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1322z/>

俺は魔人であいつは勇者で！？

2011年12月7日08時56分発行